

# 翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

## 目次

### 翻訳講義

山岡洋一

#### - 翻訳の楽しみ - 『さゆり』を読む

一流の翻訳書は二度美味しい。普通の読書で楽しめるうえ、翻訳書と原著とを比較しながら読めば、翻訳そのものを楽しむことができる。今回はその例として、小川高義訳『さゆり』を取り上げる。

### 名訳

須藤朱美

#### - 吉田健一訳『海からの贈物』

この文体でなくてはたどりつけないメッセージがある。論理的な英語の構造をそのままに、日本語として破綻のない格調高い訳文を捻り出す名翻訳家、吉田健一の神業を紹介する。

**翻訳通信** 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

『翻訳通信』は有料会員制の媒体にする予定ですが、当面はテスト期間として無料で配信します。

**定期購読の申し込みと解除** <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

**バックナンバー** <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

## 翻訳の楽しみ - 『さゆり』を読む

翻訳書は二度美味しい。一流の翻訳であればそういえます。

翻訳書は外国の著者が書いたものですから、日本の著者が書いた本とは一味も二味も違った世界が描かれていることが少なくありません。知らなかった世界を知り、考えてもいなかった物の見方を学ぶのが読書の醍醐味ですから、翻訳書を読めば読書の楽しみを味わえることが少なくないのも当然だといえます。

ごく普通の読書でも翻訳書は美味しいのですが、それだけではありません。翻訳書にはもうひとつの楽しみ方があります。一流の翻訳書と原著とを比較しながら読んでいき、翻訳そのものを楽しむ方法です。この楽しみ方を知っていると、素晴らしい趣味がひとつ増えて、人生が豊かになるでしょう。

では、翻訳そのものを楽しむにはどうすればいいのか。コツがひとつあります。ひとつしかないというべきでしょう。ひとつの点だけに注意すれば、翻訳そのものを楽しむことができるでしょう。たったひとつのコツとは、名訳を選ぶことです。翻訳には一流のものもあれば、二流、三流のものもあります。どの世界でもそうですが、一流のものはそう多くはありません。ですが、少数ながら一流のものがあるのです。そしてどの世界でもそうですが、二流三流のものが退屈でも、一流のものは素晴らしいのです。一流の翻訳を選んで、原著と比較しながら読んでいくと、翻訳の素晴らしさ、楽しさを味わうことができますでしょう。

翻訳の場合、一流のものとそうでないものを見分けるのが少々難しいかもしれません。原著が素晴らしくても、翻訳は並みという場合が少なくありません。さまざまな分野で翻訳書のベスト 10 などが発表されていますが、ほとんどの場合、評価の対象の中心になっているのは原著であって、翻訳ではありません。ですから、この翻訳書は素晴らしいと評判になっていても、翻訳が素晴らしいとはかぎらないのです。

それに、翻訳の場合には権威が確立されていません。これといった賞もありませんし、翻訳家が人間国宝になったとか、文化勲章を贈られたとかの話も寡聞にして知りません。翻訳家は普通、翻訳家という以外に肩書もありませんから、世間の評価を示すものは何もないといえるほどです。

それでも一流の翻訳はあります。また、ごく少数ですが、ほぼどの作品も一流といえる翻訳家、つまり一流の翻訳家もいます。一流の翻訳だと考える作品、一流の翻訳家だと考える人についてはこれまでも紹介してきましたし、今後も紹介していきます。もっとも紹介するのはいずれも、個人的な判断によるものです。翻訳の場合には評論すら確立していないので、個人的な判断しか頼るものがないのが現状なのです。

前置きはこれぐらいにして、今回は一流の翻訳の例として、小川高義訳『さゆり』（文春文庫）を取り上げます。原著は Arthur Golden, *Memoirs of a Geisha* で、引用には Vintage Contemporaries Edition, February 1999 を使います。

『さゆり』は映画が公開されているのでご存じとは思いますが、芸妓の一生を描いた小説で、舞台は京都の祇園です。小説の冒頭に「訳者覚書」があり、さゆりが口述した回顧をオランダ人の歴史家である訳者が翻訳したのが本書だと記されています。これはもちろん文字通りのフィクションであり、さゆりという芸妓もハールボイスという歴史家も実在しません。どちらも原著者のアーサー・ゴールデンが作り上げた人物です。アメリカ人の原著者が芸妓の一生を一人称で描いた小説ですから、主人公の口述を翻訳したものだという形をとらなければ、ここまで説得力のある小説にならなかったかもしれません。

それはともかく、原著が日本語からの翻訳だという虚構の上に成立しているわけですから、『さゆり』は翻訳という観点からじつに面白い小説だといえるように思います。もともと日本語で話された物語が英語に翻訳されたことになっているわけですから、日本語への翻訳にあたって、英語の

原文を訳す姿勢をとるわけにはいきません。さゆりが口述した物語をそのまま再現したかのような文章でなければ、日本語を母語とする読者は納得しません。さゆりの口述を記録したテープをそのまま文字にしたかのような訳文を書くように求められているのです。

そのような観点から小川高義訳の『さゆり』を読むと、たしかに素晴らしい翻訳だと感嘆します。小川高義の他の訳書について論じようとは思いませんが、『さゆり』が一流の翻訳であるのは確かだと思います。小説として楽しめるだけでなく、原著と比較して読んでいったときに、翻訳の面白さを楽しむことができるでしょう。

前述のように、『さゆり』の冒頭に「訳者覚書」があります。ここを読むと、いかにも翻訳といえる文体になっています。たとえばこういう部分です。

.....かなり長いこと私は、彼女が記録に応じたのは、偶然に恵まれた結果だと考えていた。もし日本に暮らしたままであったなら、生活の忙しさにとりまぎれ、メモワールを残すどころではなかっただろう。しかし、一九五六年、彼女の人生はアメリカに移住するという展開を遂げた。..... (10~11 ページ)

.... For a long while I believed that her choice to do so was a fortuitous accident. If she had remained in Japan, her life would have been too full for her to consider compiling her memoirs. However, in 1956 circumstances in her life led Sayuri to emigrate to the United States. (p. 2)

原文と訳文を比較すると、いわゆる直訳ではないことが分かりますが、それでも、翻訳でよく見かける文体、日本語を母語とする人が日本語で書けばこうは書かないだろうと思える文体になっているといえるはず。これは「ニューヨーク大学アーノルド・ルーソフ講座教授(日本史)」のヤーコプ・ハールホイスというオランダ人が英語で書いたことになっている部分です。

その後にはさゆりの回顧をハールホイスが英訳したことになっている本文があります。冒頭の文はこうです。

たとえば庭のある静かなお座敷でご一緒して、お茶でもいただきながら、遠い昔の思い出話を

したといたします。「これこれの人と初めて会〔お〕うた日の午後は、一生のうちの最高でも最悪でもある午後どした」などと申し上げたら、きっと茶碗を下に置いて、「おい、おい、どっちなのかね。いいのか悪いのか。両方ということはないかな」とおっしゃいますでしょうね。..... (15 ページ)

Suppose that you and I were sitting in a quiet room overlooking a garden, chatting and sipping at our cups of green tea while we talked about something that happened a long while ago, and I said to you, "That afternoon when I met so-and-so ... was the very best afternoon of my life, and also the very worst afternoon." I expect you might put down your teacup and say, "Well, now, which was it? Was it the best or the worst? Because it can't possibly have been both!".... (p. 7)

文体がまるで違って、日本語そのものになることに気づくはず。さゆりという人物がほんとうにいて、読者に語りかけているかのような文章ではないでしょうか。

物語は日本海に面した漁師町の思い出からはじまります。そこで生まれた坂本千代という少女が9歳のときに京都の祇園に売られて、置屋ではたらくようになります。その部分からは京言葉が使われるようになるので、翻訳の楽しみを考えるうえで面白い例がたくさんでてくるようになります。原著で Chapter 4、訳書で「四」の部分からいくつか例をあげて考えていきましょう。

この不可解な家に連れてこられた当座は、育った家から離されるくらいなら、手足をもがれたほうがまだましという気持ちだったように思います。もう元の暮らしには戻れそうになく、わけのわからない惨めさを噛みしめるだけで、いつになったらまた佐津に会えるのだろうと、そればかり考えておりました。..... (71 ページ)

During those first few days in that strange place, I don't think I could have felt worse if I'd lost my arms and legs, rather than my family and my home. I had no doubt life would never again be the same. All I could think of was my confusion and misery; and I wondered day after day when I might see Setsu again. ... (p. 45)

これだけの文章に、楽しめる点があくつもあります。たとえば、「訳者覚書」と同じ文体で訳せ

ば、I'd lost my arms and legs,は「もし手と足を失ったとしても」になるのではないのでしょうか。ここはさゆりが日本語で口述したことになっている部分ですから、翻訳臭のある文章では興ざめしてしまいます。「手足をもがれたほうがまだまし」という訳は、その点で見事だといえるでしょう。

また、「育った家から離されるくらいなら」の部分も注目に値します。ここで my family and my home が「家」の一語で訳されています。考えてみれば、「家」はまさにそういう意味なのです。家族と家屋とを合わせたのが「家」です。ですが、これが自然な訳だと納得できるのは、訳文をみた後に原文を読んでいるからです。まず原文を読んで、my family and my home の訳語を考えようとすると、「家」という訳語はまずでてきません。訳文をみれば、これ以外にはありえないと思えるほど自然な訳が、原文からはとても思いつけないように思える。これが名訳の特徴のひとつなのです。『さゆり』が一流の翻訳だというのは、こういう箇所がつぎつぎにでてくるからです。

では、my family and my home という原文から「家」という訳語がどうしてでてきたのでしょうか。たぶん、2つの点が指摘できると思います。

第1に、普通であれば原文をどう訳せば自然な訳になるのか、原著者が原文で伝えようとした意味が読者に素直に伝わるのかと考えていくのですが、『さゆり』の場合には、もう一捻り捻っているように思います。原文は主人公が日本語で口述したものを英訳してできたということになっているわけですから、どのような日本語を英訳すればこうなるのかと考えたはずです。英語で書かれた原文の裏にどのような日本語があったと考えれば自然なのかと。

第2に、このような理詰め思考ではないものがはたらいているはず。たぶん、訳者は翻訳を進めていくうちに主人公に感情移入しているのでしょう。いわばさゆりになりきり、さゆりの気持ちになって物語を語っているのです。そうなったとき、冷静で合理的な思考回路からはでてこない言葉が浮かんでくるのではないのでしょうか。この「家」もそうですが、その直後にある「もう元の暮らしには戻れそうになく」や「わけのわからない惨めさを噛みしめるだけで」という訳文も、原文からすぐにでてくるものではありません。原

文の I had no doubt life would never again be the same. や my confusion and misery を訳そうと考えているのは、「もう元の暮らしには戻れそうになく」や「わけのわからない惨めさ」という表現が浮かんでくるとは思えません。ここで訳者は訳しているのではなく、書いているのでしょう。さゆりになりきって書いている。だからこそでてくる文章なのだと思います。

同じページのつぎの段落はこうはじまっています。

しっかり働いて行儀よくしていたら、そのうちお稽古も始まるのだと、おかあさんは言いました。おカボに聞いた話では、お稽古というのは祇園の一角にある学校のようなところへ行き、お囃子、舞、茶道などを教わることのようにです。…… (71 ページ)

Mother had told me I could begin my training within a few months if I worked hard and behave myself. As I learned from Pumpkin, beginning my training meant going to a school in another section of Gion to take lessons in things like music, dance, and tea ceremony. .... (p. 45)

これも、英語で書かれた原文の裏にどのような日本語があったのかを考えた訳文ですし、さゆりになりきっているから書けた文章だといえるでしょう。どの一語をとっても、原文からすぐに出てくるものではありません。

ここでとくに注目したいのは、「学校のようなところ」という表現です。原文をみると、a school とあるだけで、「~のようなところ」にあたる言葉はないように思えます。ではなぜ、a school から「学校のようなところ」という表現がでてきたのでしょうか。

この school という言葉は後に何度かできます。1 か月ほどたって、おカボに連れられて「学校のようなところ」にはじめて行くときの様子を描いた部分に、こういう表現があります。

さぞかし硬いイカだったのでしょ。ゆるやかな坂道をお稽古場のほうへ歩いて、木の門にたどり着くまで、くちやくちや噛んでおりました。……建物については、目の前にあるのが何かわかりませんが、いまにして思えば、敷地内のほんの一角だけが女紅場〔によこう

ば)として、いわば学校になっていたわけです。  
..... (85~86 ページ)

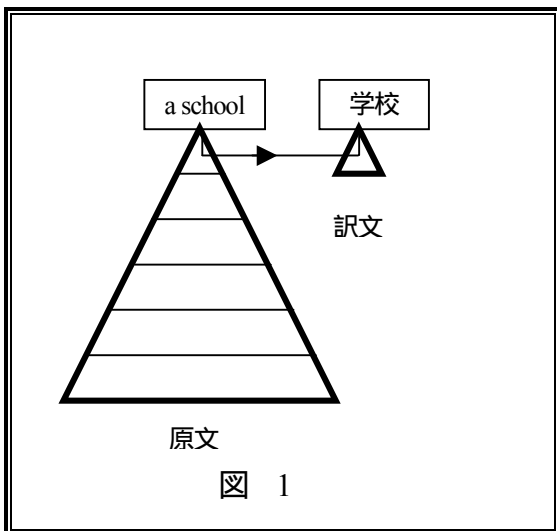
It must have been a tough piece of squid; Pumpikin chewed it the whole way up the gentle hill to the wooden gate of the school complex. .... As for the buildings, I didn't understand what I was seeing at the moment, but I now know that only a tiny part of the compound was devoted to the school. .... (p. 54)

このように、a school が初めは「学校のようなところ」と訳され、つぎに the school が「お稽古場」と訳され、つぎに「女紅場」と訳されているのです。主人公の目線で、じつに細かい訳し分けをしていることに気づくはずです。

この3つの訳語をくらべると、はじめになぜ「学校のようなところ」という表現を使ったのがみえてくるように思えないでしょうか。お稽古について少し先輩のおカボに聞いた。聞かれた側は「女紅場」といえば相手が分かるはずがないし、「お稽古場」といっても分かるかどうか。そこで「学校のようなところ」に行くと言ったのだらうと。

訳文を読んでこのように感じるのはおそらく、訳者が翻訳にあたって、school という何気ない言葉の裏にある意味を深く考えたからです。3番目の「女紅場」という訳語は祇園という独特の世界の言葉ですが、それをいきなり使うのではなく、「学校のようなところ」、「お稽古場」、「女紅場」という順に使った点をみれば、訳者がこの原文の意味を深く考えたことがはっきりしているように思えます。

「学校のようなところ」という表現をみると、翻



訳というものがある意味で、原文の意味をどこまで深く考えるか、あるいは感じ取るかの勝負であることが理解できるのではないのでしょうか。原文の表面にある意味をつかみ、その奥にある意味をつかみ、さらにその奥にある意味をつかんでいく。原文の表面からその奥へ奥へと、意味の理解を深めるほど、説得力のある訳文が書けるようになるのだと思います。

翻訳をするとき、訳者はかならず意味を考えています。意味を考えなければ一字たりとも書けないからです。たとえば、この a school についていうなら、a school of fish であれば「めだかの学校」ではなく、「魚の群れ」になります。この部分の原文には going to a school ... to take lessons とありますから、訳者なら誰でも意味を考えて、この a school が「群れ」ではなく、「学校」かそれに近いものだ判断します。これが表面にある意味です。この表面の意味だけに止まって、その奥を考えなかった場合、たぶん「学校」という語を使って訳すはずで

原文のごく表面の意味だけを考えた翻訳を図式化すれば、図1のようになります。原文の school の裏には重層的な意味があり、この点を図ではいくつかの段階の深みとして表現しています。原著者のアーサー・ゴールデンは大量の事実を積み重ね、想像力を駆使して、さゆりという人物像を作り上げています。そのさゆりがこの部分を語り、この語を使った裏に、さまざまな事実と記憶があると、原著者は想像しているはずで

そういう事実と記憶の深みを図の三角形の深みで示しているのです。これに対して訳文の側は、さまざまな事実と記憶を考慮していないので、深みのない薄っぺらな文章になります。その結果、原文と訳文の間に断絶ができ、原文を読んだ方がいいという翻訳になりかねません。

もう一步深く考えた場合にどうするのでしょうか。たぶん「学校」がふさわしい語なのかを考えるでしょう。「教室」などの訳語を考えるかもしれません。さらに考えて、祇園には独特の言葉がたくさんあるので、「学校」とも「教室」とも呼ばない可能性があることに気づくかもしれません。その場合、祇園のことを調べてみるでしょう。翻訳学校などではこれを「調べもの」というようです。いまなら、「調べもの」にはたいていインターネットを使います。少し検索すれば、祇園では

「女紅場」という言葉を使うことが分かるでしょう。表面のひとつ奥に別の意味があって、これを「女紅場」という言葉で表現することが分かったわけです。「調べもの」が得意だという訳者が考えるのはたいてい、ここまでです。そのさらに奥にある意味は考えません。この場合、「女紅場」という言葉を使って訳すことになるはずですが。

この場合、「祇園の一角にある学校のようなところへ行き」の部分がたとえば、「祇園の一角にある女紅場へ行き」になります。こう訳したとき、たいていの人知らない言葉をうまく探し出したのですから、訳者はたぶん鼻高々でしょう。ですが読者は「女紅場」という馴染みのない言葉がいきなりできてとまどいます。小川訳がどうなっているかをみると、「女紅場」をはじめで使うとき、「女紅場として、いわば学校になっていた」と書いており、読者への細かい気遣いが読み取れます。

原文の意味を表面から一步だけ深く考えたときの翻訳を図式化したのが、図2です。訳文は少し深くなりますが、原文とは比較になりません。原文と訳文の断絶は小さくなりますが、なくなっていない。

「学校のようなところ」という表現は、原文の表面の意味でも、そのひとつ奥にある意味でもなく、はるかに奥にある意味を考えた結果です。訳者が原文の奥の奥にある意味を考えて書いているから、訳書の読者は想像力を刺激されて、主人公とおカボの会話までみえてくるように思えるのです。

このような翻訳を図式化したのが図3です。原

著者がそうしたように、訳者も事実を積み重ね、想像力を駆使して、原文の裏にあるさまざまな事実と記憶とを想定して訳文を書いています。原文の意味を奥の奥まで深く考えた結果ですから、原文と訳文の間に違いはあっても、断絶はなくなります。原文と同じように深みをもった文章になり、二度美味しい翻訳になります。

図1から図3では a school というひとつの表現をどう訳すかという観点から翻訳を図式化したものですが、一流の翻訳と並みの翻訳の違いをこれとは違った観点から図式化することもできます。その一例が図4と図5です。

文章は通常、多数の単語を組み合わせて作られています。そこで使われている個々の単語や表現は、それぞれが単独で何かの意味を伝えているわけではなく、文章のなかの他の単語や表現と関連しあいながら、文章という組み合わせの全体で意味を伝えています。たとえばこの部分の原文では、school という言葉は training、music、dance などの言葉と関連しあい、結びつきあい、組み合わせられてひとつの世界を作りだし、読者に意味を伝えているのです。図4の左半分は、原文の一部を取り出して、相互の関連と結びつきを図式化したものです。実際にはもちろん、はるかに多数の言葉や表現が網の目のように関連しあい、結びつきあっているのですが、ここでは4つの語だけを取り出して、図を単純にしています。

図3のような訳文では、たとえば「学校のようなところ」という表現が、「お稽古」「お囃子」「舞」などの表現とそれぞれに関連しあっています。図4の右半分は訳文でこれらの表現が密接に

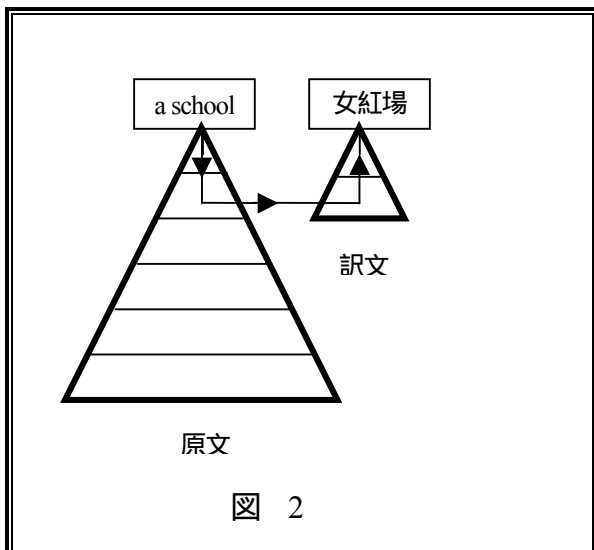


図 2

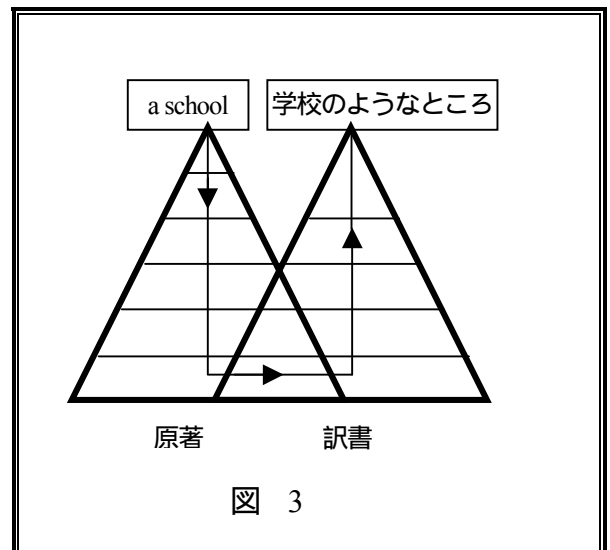


図 3

関連しあっていることを示しています。

そうになっているのは、訳者が原文の世界を理解し、その世界を日本語という違った言語で再構成しているからです。この点を図4では、左側の原文の世界から右側の訳文の世界に向けた矢印で示しています。原文の school、training、music、dance などの語は、訳文の「学校のようなところ」「お稽古」「お囃子」「舞」などの表現と対応しているようにもみえますが、実際には原文の語から訳語が直接に導き出されているわけではありません。原文の世界から再構成された訳文の世界のなかで、語や表現が選択されています。

このように、図3、図4のような翻訳では、原著の世界を日本語の世界として再構成しているので、読者は訳者の作った世界にすんなりと入り込むことができます。読書を楽しむことができます。

これに対して図1のような訳文では、たとえば「学校」という表現は、原文の school から導き出されています。この結果、訳文に使われた他の表現のそれぞれとのつながりが弱いのが通常です。ときには、訳文に使われた語や表現の間の関連、結びつきが強い場合もあるでしょうが、それは原文で強い関連のある語や表現から導き出されているからであって、訳者がそう意識した結果ではないこともあるでしょう。その様子を図式化したのが図5です。

この場合に訳者は、原文が作り上げた世界を鮮明にとらえることができないまま、原文の表面をなんとか日本語にしようと苦闘しているのが普通

でしょう。あるいは、原著の世界を原語の世界では理解できていても、日本語の世界として再構成することができていない場合もあるでしょう。いずれにせよ、訳文が形成する世界は鮮明ではありません。そのため、訳文に使われた個々の表現は、他の表現との関連や結びつきが弱くなっています。文脈にふさわしくない言葉、他の表現との関連や結びつきがあまりない言葉も使われています。こういう翻訳を読むとき、読者は無意識のうちに訳文から原文を想像し、そうして再構成した原文から意味をくみとっていることが多いはずで

それでも読めているのは、原著に力があるからです。たとえば、物語が圧倒的に面白かったり、論理の力が強かったりするからです。ほんとうは、こういう翻訳書は読まないのが正解です。どうしても読みたい本であれば、原著で読むべきです。

しかし『さゆり』のような名訳であれば、これはもう、翻訳書を読む方が何倍も楽しめます。何倍も深く理解できます。そういう翻訳書なら、翻訳そのものを楽しむこともできます。原著はペーパーバックなら 1000 円少して買えるのが普通でしょう。翻訳書も文庫なら 1000 円以下で買えます。2000 円ほどで何か月も楽しむことができますから、コストという面でも最高の趣味になるのではないのでしょうか。

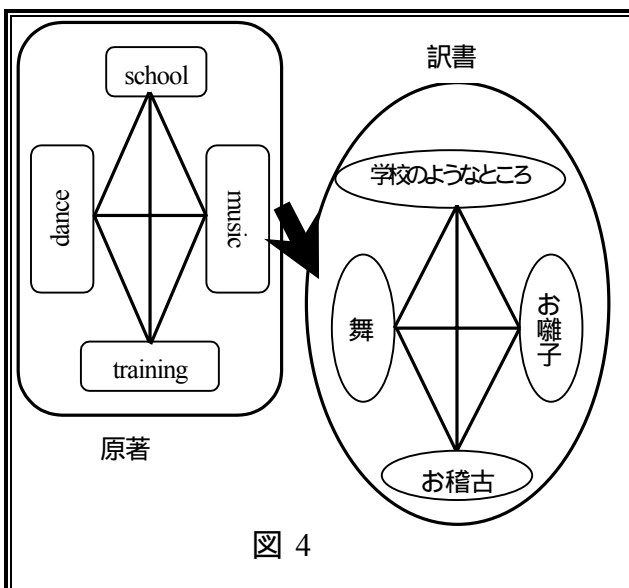


図 4

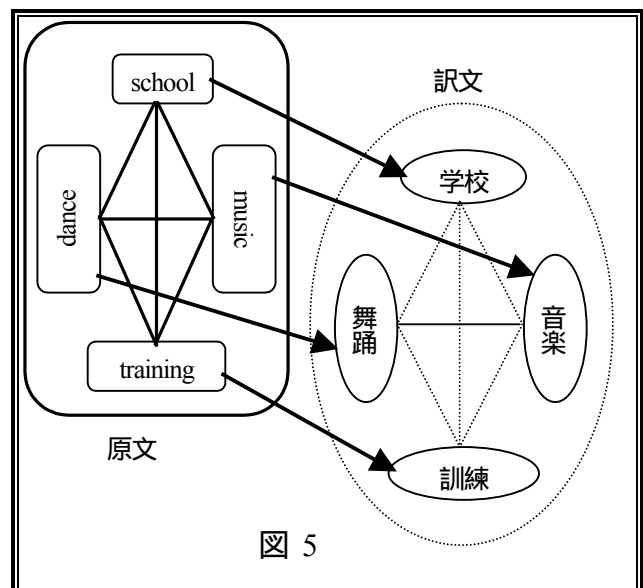


図 5

## 吉田健一訳『海からの贈物』

村上春樹やよしもとばななの小説を漫画のようだと評する人がいます。パラパラとめくるだけでざっと読め、それでいて切なさや皮肉があり洒落ています。モチーフの捉え方が現代的で若者の心をつかむ文章。一瞬で映像が、風景が、表情が喚起される文体。だから午後のお茶の時間に合う、寝る前のベッドが似合う、電車の中でも、たいくつな授業中の内職にも、時と場所を選ばず読者を物語の世界へ引き込む圧倒的な力があります。これがエンターテインメントだといわんばかりのマスな力があります。それと対極にあるのが吉田健一訳『海からの贈物』です。どういった観点で対極にあるかということ、読者を選ぶ文章という点です。

スノッブな人間でなくてはわからない、文学的素養がない人間には読めないという意味ではありません。また、駄文を重ねた翻訳書のように文章として成り立っていないために、翻訳物を読みなれた読者にしか解読できないという意味でもありません。読者の置かれている状況を選ぶ文章という意味です。

『海からの贈物』は島で過ごした 2 週間の思索を書き綴ったエッセイです。原著は極めて平易で、英語らしい英語で書かれています。難解な文構造は用いられず、論旨は簡潔できわめて論理的です。ところがこういった英語らしい英語ほど翻訳者泣かせの素材はありません。並程度の力量しかない翻訳者が訳すと、一字一句忠実な訳語を当てはめただけの稚拙な和文になるか、あるいはそれを恐れて日本語に引き寄せて訳しすぎたがために意識がコマ切れになったり、最悪は論旨が破綻していたりする擬似創作文になります。前者は意味が通らないし、後者は読み手をイライラさせます。易しい英文は論理性という持ち味が前面に押し出されているがゆえ情緒的な日本語に馴染みにくく、翻訳した場合、美文のまま論旨を保つことが困難なのです。

しかしながら吉田訳では品格ある名訳に仕上がっています。論理的な英文の構造をそのままに、日本語として破綻のない格調の高い翻訳です。読み始めはごつりごつりとした彫りの深い文章に一瞬

戸惑いを感じるのですが、読み進めるごとにいつの間にかその凹凸が剛健な味わいに変化していきます。一部分だけを取り上げるのでは十分にその味わいを堪能することが難しいのですが、とりあえず例を挙げて見ていきたいと思います。

I remember again, ironically, that today more of us in America than anywhere else in the world have the luxury of choice between simplicity and complication of life. And for the most part, we, who could choose simplicity, choose complication. War, prison, survival periods, enforce a form of simplicity on man. The monk and the nun choose it of their own free will. (原文ペーパーバック版 p33)

私はそれに就いて、今日、アメリカに住んでいる私たちには他のどこの国にいる人たちにも増して、簡易な生活と複雑な生活のいずれかを選ぶ贅沢が許されているのだということを幾分、皮肉な気持ちになって思い返す。そして私たちの中の大部分は、簡易な生活を選ぶことができるのにその反対の、複雑な生活を選ぶのである。戦争とか、収容所とか、戦後の耐乏生活とかいうものは、人間にいや応なしに簡易な生き方をすることを強いて、修道僧や尼さんは自分からそういう生き方を選ぶ。(A・M・リンドバーグ著、吉田健一訳『海からの贈物』新潮文庫 p31)

こう並べると吉田訳が原文の論理的な流れをかなり忠実に盛り込んでいる点に気がつきます。そのため出だしの部分は岩のようなごりごりした硬く質素な印象があります。ところが比較級を用いた主語、関係代名詞の非制限用法、無生物主語といった日本語とそぐわない文章構造では、他よりも一歩踏み込んだ表現が用いられています。その踏み込んだ表現が、英語的論理展開と和文的思考展開との間の架け橋になっています。吉田健一訳は大枠で英語的な論理の流れを維持しつつ、日本語として論理の飛躍する部分では読者の意識にぴたりと寄り添っているのです。

例文の more of us in America than anywhere else in the world という長い主語を読み解く場合、受験英語を経てきた人間は、まず比較表現であることに注目します。前者(アメリカに住む人)と後者(その



他の国に住む人)を同格に捉えて比較するよう、学校で教わってきたからです。一方で吉田氏はこの部分を「(前者)は(後者)にも増して…」と訳しています。吉田訳では後者が前者の意味を確定する修飾的要素としてさりりと訳されているのです。この部分を見るだけで、学校英語とはまったく異なる解釈がなされていることがわかります。この訳文は日本の英語学習者がいくら頭をひねろうとも紡ぎ出せはしない高級な英文解釈の結果です。これぐらいのことでなにを大げさなと思われるかもしれませんが、この訳文は英語でものを考えることのできる訳者にしかできない偉業です。

たとえばわたしのような中学英語を源流とするごく一般的な日本の英語学習者はこの that 節内を、まずこんなふうに捉えます。

アメリカに居るわたしたちは、世界中の他のどの国に居る人よりも、生活における単純と複雑を選択する自由を所有している

整理された解釈であり、この部分だけ取り上げて意味がわからないということはありません。なのにもかかわらず、言葉にしがたいむかつきが残るのはなぜなのでしょう。比較を表す「よりも」という言葉に異物感が残り、否が応でも文章の骨格を意識させられるからです。「よりも」の部分で意識がいったん止まり、そこから先へ進むための集中力がそがれてしまいます。100 ページ程度の本の中に 2、3 回登場するぐらいなら別に目くじらを立てる必要もないでしょうが、英語の比較表現ごとに意識の断絶を強要されるとしたら、1 ページ読むごとに幾度となく意識の流れを中断しなくてはならないでしょう。そんな翻訳書など読めたものではありません。

一方、吉田訳はこの部分を「にも増して」とで軽やかに訳しています。そのため文章の骨格を意識することなく論旨を追うことに注力できます。上に挙げた英文解釈を始点としているかぎり、「にも増して」という表現にたどりつくのは不可能です。

また、2 文目の関係代名詞の非制限用法、who と仮定の助動詞 could も「のに」の一言ですべてを表現しています。さらに War, prison, survival periods の無生物主語は「とかいうものは」というフレーズが付け加えられることで主語としての強い意味

合いが薄まり、さらりと意味が通るようになっていきます。原文にはないからと、試しに「とかいうもの」を抜いてみると、意味は通るが無骨で下品な印象を受ける文になります。

訳文の読者が意識を遮断されたり、品のなさに辟易したりしないよう手を加えつつも、文章の骨格が持つ英語的論理展開に乱れを生じさせない。吉田健一訳は静止した湖のような格がありながら、華美な装飾を取り払った論理的な訳文です。

吉田健一訳『海からの贈物』の文体における最大の特徴は丁寧に読むことはできても、飛ばし読みができないという点です。意識の流れを遮断されないため論理的な文章であっても味わいながら読めるのですが、その論理性の精度が現時点で日本語の持つ包括力を凌駕しているため、ペラペラと読み飛ばすような読書には適していないのです。なので読者は自然と落ち着いた姿勢で本に向かうようになります。周りがうるさくて集中できないとか、今すぐやらなくてはいけないことがあって焦っているとか、そういったなんらかの事情で平静な心持ちになれない場合には、文字を追うことさえ苦痛になります。この点において吉田健一訳『海からの贈物』の読者は『TUGUMI』や『ノルウェイの森』とはちがった本の読み方を強いられます。作家の力量によって創りあげられた空飛ぶ絨毯に乗って物語の世界に連れて行かれるのではなく、読者自身の歩み寄りによってリンドバーグ夫人の心理状態に近づいていかななくてはなりません。この過程こそが『海からの贈物』を読む醍醐味です。そしてその効果を生み出しているのが吉田健一の文体に他ならないのです。

レビューや批評に目を通して、吉田訳が直訳的で読みにくいという少数意見に遭遇しました。何をもって良しとするかは人それぞれ千差万別なので、そこに意見するつもりはないのですが、読みやすさイコール文章の巧さだと考える向きはいささか読書体力の欠如とも感じられます。たとえば自力で歩いて登らなければ見ることのできない景色があるように、一言一言がみしめるように読んでいかなければ到達できないメッセージというものも存在すると思うのです。疲れきった体と心を癒そうと、海からのメッセージを書き留めたりリンドバーグ夫人の作品には、むしろそうした地に足のついた文章が似合います。ジェットコースターのような文章では読者に考える余地を与えま

せん。文字を追いながら自分の生き方を見つめ直すことを提案する本が、ジェットコースターのような文体を採用するのは間違いだし、自己啓発なるものは本来読みやすくあろうはずがないのです。

誤解があるといけないのでもう少しだけ詳しく説明させていただくと、ジェットコースターのような文章が低級だというではありません。伝えたいメッセージには適した文体があると主張したいだけです。優しい愛の言葉を歌うシャンソンがあるとします。流行のミュージシャンが編曲して熱いロックに生まれ変わることもあるでしょう。しかし聴く側の心に届くメッセージは決して同じではないはず。発信する側の思いによって、たとえ表面に現れる言葉は同じでも乗せるリズムが変われば受け取る印象もまた変わります。シャンソンが素敵だ、ロックは劣るといった議論は意味のないことです。その気持ちをどういう方法で伝えるかの差にすぎないからです。文章の場合はそれが文体の問題になります。議論されるべきは、結果として読者の心に届く文体であったか、息づかいであったかということだけです。そういった意味で吉田健一訳は『海からの贈物』にぴたりと合った名訳だと思うのです。

吉田訳は日本語が消化しきれていない高度な論理性ゆえに読者の読む速度を遅らせます。そして上品で丁寧な文体が読者に考える余地を残して、ものを考えながら読むことを促します。そうやって書かれている内容を理解する心境に達して、リンドバーグ夫人の伝えようとした『海からの贈物』というメッセージを受け取ることができるのです。抜粋すると効果が薄れてしまうので、すこし不本意なのですがあまりに誠実な文章なので、ぜひここでいくつかご紹介したいと思います。

Naturally. How one hates to think of oneself as alone. How one avoids it. It seems to imply rejection or unpopularity. (p41)

勿論、誰も自分が孤独であるとは考えたくはない。なんとでもしてそう考えることを避けようとするので、それは人に嫌われているとか、仲間外れにされているということと同じに思われる。(p39)

When you love someone you do not love them all the time, in exactly the same way, from moment to moment. It is an impossibility. It is even a lie to pretend to. And yet this is exactly what most of

us demand. We have so little faith in the ebb and flow of life, of love, of relationships. (p108)

我々が誰かを愛していても、その人間を同じ具合に、いつも愛している訳ではない。そんなことはできなくて、それができる振りをするのは嘘である。しかしそれにも拘らず、我々はそういうふうにあされることを要求していて、我々は生活や、愛情や、人間的な関係の満ち引きに対してそれほど自信がないのである。(p108)

上に挙げた二つの例に込められたメッセージは決して元気いっぱいの方に理解しようと思う類のものではありません。悩むところがあったり、生き方を振り返りたい気分だったり、気持ちが引き潮のときでなければ痛切に感じるののできない文章です。原文だと意味が理解できるのですらすらと読んでいけるのですが、不思議なことに吉田健一訳の方がそう簡単に先を急がせはくれません。心の中が陽気すぎたり、殺伐としていたりすると文章が頭の中でうまくイメージ化されず、ただ文字を追うばかりになります。かといって文章が悪いのかといえば、やはり先ほど検討したように決してそういうことではないようなのです。まず不用意に勢いついた気分をいったん静めなくてはなりません。謙虚さを忘れたままではメッセージを受け取れない力が働いています。その代わり、この文章を読む状況に心がはまったとき、静かな波が押し寄せるかのように『海からの贈物』は大きなメッセージをはらんで読者を包み込んでくれます。

様々な価値観に素手で触れては辻褄を合わせようと躍起になることがあります。落ち込んだり、背伸びをしたり、卑屈になったりしているうちに自分は何がしたかったのか、どうありたかったのかがわからなくなる毎日です。実を言うとわたしにとってこの本は何度も挑戦していながら、その度に挫折していた難攻不落の1冊でした。原文は読むことができても、どうしても吉田健一の訳文には足元をすくわれるような、とうせんぼされるような気がしていました。今回、年の終わりに駄目元で手にして、初めて最後のページを開くのを許されるという体験がありました。そうしたら言葉の誠実さに涙が止まらなくなりました。